



冥土喫茶



川崎ゆきお

とある喫茶店に朝一番に来る老人グループが今朝はいない。

「静かですねえ」

「音楽がよく聞こえるようになりました」

「どうしたんでしょうねえ、あの人達。示し合わせて何処かへ出かけたのでしょうか」

「そろって冥土へ旅立ったのかもしれませんが」

「冥土喫茶へ」

「そうですねえ。しかし、どうしたんでしょう。私は毎朝ここに来ていますが、あの人達は必ずいます。誰もいない日なんてないかも」

その店の店員は全員バイトで、シフト的に同じ人は週に二日と来ない。そのため、客のことをよく知っているのは客同士だ。

「あり得ないですねえ。異変ですよ」

「あなたも毎朝来てますよねえ」

「いえ、週に一度ほど来ない日もありますよ。用事でね」

「私は用事はこれだけなので、無遅刻無欠席です。少し病んでいた日もありましたが、その日も来ていました。ここに来られるうちは大丈夫と言うより、ここへ来れる力がなければ医者へも行けませんよ」

「しかし、あの人達の笑い声、一人、かなり下品な笑い方をする人がいたでしょ。グファファって、いやな笑い声です。あのグは自我を押し出したときのグでしてねえ。下劣に聞こえる。まあ、そういう人なんでしょう。顔つきも、言葉遣いも、下品だ。だから、朝からあの笑い声を聞かなくてすむので、今朝はいい感じ です」

「そうですか、私はダチョウが鳴いているように聞こえていました。まあ、鳥なら仕方がないと」

「しかし、何処へ行ったのでしょうかねえ」

「店替えじゃないですか」

「都替え」

「そう、遷都」

「ここは安いですよ。ここより安いところで近所となると……」

「ハンバーガー屋があります」

「あそこは狭いでしょ。あの人達十人近くいますよ、多い日は。それで朝から昼まで粘っていますからね、無理でしょ。それにテーブルが足りない」

「そうですねえ。条件的には、この店は広いし、客も少ないので、迷惑にならない。だから遷都する必要はない」

「ゲルマン民族の大移動じゃないですか」

「やはり事情があるんだ」

「何でしょうねえ」

「やはり、どこかへ連れ立って遊びに出たのでしょ」

「だから、冥土ですよ」

「ああ、それに近いかもしれませんねえ。仲間の一人が亡くなって、葬式とか」

「朝からですか。あれは昼前後じゃないですか」

「朝仲間なので、朝から葬式をやっているのかもしれませんが」

「誰でしょ」

「さあ、十人ほどいたけど、いつもは五六人でしたからねえ。全員集合で十人前後です。それに全員の顔を覚えているわけじゃない。あの人達がいるテーブル側は見ないようにしていましたし」

「突然消えたわけですからねえ」

その翌朝、この老人グループはいつものように姿を現し、下品な笑い声も高々としていた。

了